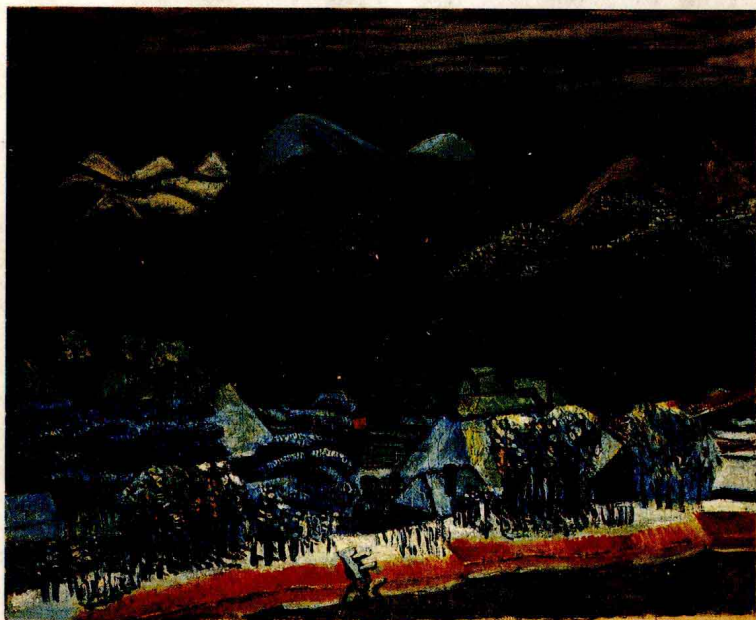


山陰を旅する人たち

——山川登美子から種田山頭火まで——

上村武男



山陰を旅する人たち

山川登美子から種田山頭火まで

上村武男

著者略歴

一九四三年、兵庫県尼崎市に生まれる。

著書に、詩集『帰命』（私家版）、歌集『伝記する歌』（白地社）、評伝『吉本隆明手稿』（弓立社）『高村光太郎』（同上）『哲学徒と詩人』（編集工房ノア）『梶井基次郎 落日の比喩』（同上）、哲学エッセイ『八気配』（白地社）『西田幾多郎 過程する球体』（行路社）など。

現住所 〓 尼崎市水堂町一―二五―七

山陰を旅する人たち

一九八九年二月二五日一刷発行

一九八九年三月二六日二刷発行

著 者 上村武男

発行者 濁沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市北区中津三一―一七―五

電話〇六（三七三）三六四一

FAX〇六（三七三）三六四一

振替大阪四―三〇六四五七

印刷製本・亜細亜印刷

©1989 Takeo Uemura

0095-8901-7641

不良本はお取り替えいたします

山陰を旅する人たち*目次

かつぶしと登美子の墓……………	7
——山川登美子・若狭小浜	
草むらのなかの放哉……………	29
——尾崎放哉・若狭小浜	
純孝の声と自動販売機……………	53
——前田純孝・但馬諸寄	
源左が語った……………	73
——因幡源左・因幡山根	
寛次郎のなかの子供……………	99
——河井寛次郎・出雲安来	
才市の下駄のうえのなむあみだぶつ……………	123
——浅原才市・石見温泉津	

修一郎の空気……………149

——田畑修一郎・石見益田

泰男の庭……………172

——香月泰男・長門三隅

魂の反り橋、みすゞは渡って行った……………193

——金子みすゞ・長門仙崎

この夏草で山頭火は死ねない……………225

——種田山頭火・長門川棚

あとかき……………250

カバ―装画

香月泰男「雪降りの山陰風景」
山口県立美術館蔵

山陰を旅する人たち

かつぶしと登美子の墓

友人を誘って、若狭の小浜^{おぼま}へ行きたいと思いつながら、仕事に追われていたり、小学生の娘にせがまれて市民プールで泳いだり、息子と近くの公園で蟬をつかまえたりなどしているうちに、夏の日がどんどん過ぎた。ようやく八月のお盆の十二日に友人とわたしは大阪駅で落ち合って、二泊三日という予定の小旅行に出発することができた。

ジュン——それは、わたしより二つ三つ年若い友人なのだが、彼と一緒に、中年男の二人連れというおよそ色気も何もない組み合わせで、国鉄、とはもういわないのか、JR大阪駅中央広場の噴水前で、

「やあ、いたいた」

「おそかったやないか。待ちくたびれてしもうたで」

など言いあい、その日の朝九時半、お互いに小さなカバンひとつぶらさげた軽装で、京都へ向けて東海道線の新快速に乗り込んだ。

京都発十時二十八分、二条經由敦賀行急行「丹後一号」にまにあわすためである。

この小旅行は、どちらから発案したというのでもなかった。わたしのほうには、小浜出身の明治の「明星」派歌人である山川登美子と、大正末期にわずか二ヶ月ばかりであったが同じく小浜の寺に住み込んでいた経歴をもつ「放浪の俳人」尾崎放哉とのことを、ちょっと調べてみたいという下心があった。連れのジュンのほうには、生まれが丹後の舞鶴であることから、そこに近い小浜の町を、初めて訪ねるわたしに案内するという役目があった。が、彼にはまた、いわば「かすめて通る帰郷」とでもいった趣があった。

「いやあ、ふるさととは遠きにありて想うもの、ですよ」

と、彼は笑っているが、けれどもひとは、いくら捨てたのであれ、あるいは石もて追われたのであれ、知らず知らずにくころの足はみずからのふるさとへ向く。魂の磁針は、いつでもそっちの空に振られているのである。

わたしは兵庫の阪神間の生まれである。いま住んでいるのもそこだ。ジュンは大阪・箕面に住んでいる。娘と息子と一人ずつ子供を持っているのは両者同じだが、仕事はちがう。女房のかおも、ちがっている。

たとえば、一方のかみさんというのである。

「あなた、妻のわたしが読んでもおもしろい本を書きなさい。そうすれば、キット、売れること

まちがいなしよ。わたしは通俗なる一般読者の代表なんだからね」

もう一方がいう。

「アンタ、趣味や道楽で本作りをしているの？ 売れる本をたまには作ってほしいものだわ。一家四人の生活、かかってんだからね」

ジュンはじつは文芸書中心の小さな出版社を大阪でやっているのである。奥さんが副社長か専務か何かで、友人は仮りそめにも社長さんなのだ。生活がかかっているわけである。

「まあ、弥次さん喜多さんでいきましようや」とジュン。

「うん。ほんまは、連れがアンタやなかったらもつとええけどな」とわたし。

いやいや、かみさんに限らず、世の中年男というもの、皆、同じようなものである。

「丹後一号」には、幸いなことに坐れた。ただし一人だけ。だいいち、こんなお盆のど真ん中にふらふら思いつきみたいな旅をするものではないのだ。座席が空いているわけもない。仕方なく、ジュンがさっそく缶ビールとつまみを買い込んできて通路に立った。

嵯峨、亀岡から園部を経て綾部までは山陰本線だ。保津峡の刻み込んだ流れが、列車の走行に、付かず離れずに寄り添う。溪流下りの尾形舟がみえる。別の流れで、釣り人も釣り糸を垂れている。天気は上天気だ。

二人が、そんな窓外の景色について語りながらゆっくり缶ビールを飲みほすころには、「丹後

「一号」は綾部の町並みに入り、やがてまた野山の中を走った。稲が、阪神間とはちがい、もうずいぶん育っている。実をいっぱい穂に稔らせ、風に揺れている。列車はそのすぐ眼前を走る。山あい近くにそれと細かい段々畑になった。同じ見慣れた稲穂波なのに、こうして見知らぬ町の見知らぬ野でそれに出遇うと、なぜかしら別様の、ふっと夢幻のような、遠い記憶の古層と肌が触れたような、変にちぐはぐに懐かしい、すうっと足もとを見えない風が吹いて通るような一種非現実の感にとらわれてしまう。

「なあ、ジュンよ。なんやら、もう旅に出たって感じやなあ」

「はい、もう遠くまで来ました。あたしだって、四十年、生き抜いてきたんでございます」

関係のないことをいう、と思つてわたしは初めて乗るこの区間の山陰本線の窓外の眺めに視線をあそばせていた。京都に住んだこともあるジュンには、故郷への往還にしばしば使った鉄道なのであるう、ちよくちよくと窓外の説明をしてくれる。わたしは次第に遠く学生のころにでも帰っていくような、愁いが底を洗う旅情を感じはじめていた。

2

「丹後一号」は西舞鶴で、三十分ほど、止まった。ここで身を切断して、半身は宮津線に入れて西へ離し、半身は小浜線で福井の敦賀へと向かわせるのだった。

「へえ、三十分も停車してるんか。いなかやなあ」

とわたしは、小さい頃によく乗った福知山線の蒸気機関車の煤煙のにおいですが、ふいに鼻先に甦えっている。ガチャン！という、あの連結器がかみ合うときの重く心地よい金属と金属がぶつかる音響も、懐かしく耳元に聞く思いだ。大阪から尼崎を経由して丹波の福知山へ通じているあの福知山線も、夏休みに入る度に母の田舎のある三田の山奥へ遊びに行った小学生の頃には、全線が単線で、もくもく黒煙を吐く蒸気機関車が——ディーゼル車のこともあったが——引っぱっていたつけ。トンネルに入るたびに、音たてて窓を降ろし、それでも乗客みんなの顔が、すすけて黒くなった。

「ふるさとやなあ」

と、ジュンはジュンで、想いが微かな白波を立てて、底のほうでゆっくり動いていたにちがいない。

「ほら、あれがぼくの通ってた高校ですよ」

やや言葉少なになって、そんなことを教えてくれるのだった。彼の生家は、舞鶴の北方、日本海に面した小さな漁村にいまもある。

西舞鶴からは鈍行に変わり、ひとつひとつの駅に停まって、やがて高浜、大飯あたりからそこの風光が、しっとりと落ちていて、そっと抱きしめる腕の中のような、一種淋しい温かさにく

るまれてきた。若狭湾が見えはじめる。青葉山が見えはじめる。

「青葉山はこのあたりからの眺望がいいのですよ。小浜のほうから見ると、若狭富士っていわれるくらい秀麗な姿になるんだけど、ほんとに、ホレ、三つぐらいに峰が別れて折り重なって、これが男性的なほんとの青葉山の姿なんですよ、こっちから見るのがね。水上勉もそんなことを何かに書いていますが、そのとおりだね。彼はあの山の中の分教場に勤めていたことがあるんだね」

若狭高浜、若狭本郷、勢浜などという、野の中の小駅で、家族連れや若い女や大学生のグループが、まとまってごそつと列車を降りた。

ジュンは舞鶴の手前で坐ることができていたが、このあたりまで来ると、二人とも前のシートに両足を投げ出して、ゆったりとしたものである。「丹後一号」のほうも、特急待ちで十八分停車します、という具合でこれも到ってのんびりしたものだ。

「このへんの浜は海水浴にいいんですよ」

「京阪神のほうから、釣にもよく人が来るらしいね」

「うん、磯がいいんだ」

しかしそんなことを言い合っているうち、車窓に小浜湾が見え隠れし、ちりちりと登美子の歌の言葉がわたしの胸に浮かび、わたしはやがてふわっと、眼前の友人の存在を忘れていたのだっ

た。

身の置き場がなく淋しかったり、落ちる底がないほどに虚しかったりするばかりが、人生ではないと思う。また、短命なひとの生ばかりが惜しいのではないと思う。それなのにわたしはなぜかしら、そんな人生の姿に氣を惹かれて仕方がない。そういう性分がどこかにあって、山川登美子の歌というものも、それはいわゆる『恋衣』時代——つまり与謝野鉄幹や鳳晶子や茅野雅子らといっしょに、若々しい激情にまかせて歌っていた『明星』歌人の時代よりは、そののちの病いを得て京都と故地小浜で療養していた最晩期に優れた作品があって、その最も優れた歌は、皆、そうした短命を予定されたひとの深い生の調べに充ちている。

わたしは、きっと、登美子のように意志強い才女で、短命薄幸な女性のほうは、振り向かないほうがよい。それなのにわざわざ東京の古本屋に注文してまで、四万円もする『山川登美子全集』上下二巻本（光彩社、昭和四十七年）を手に入れ、この旅に発つ前にそれを読んでいるのだ。その全集の中にこんな歌が収められている。

ながらへばさびいたまし千斤せんぎんのくさりにからみ海に沈まむ

胸たたき死ねと苛む嘴ぶとの鉛の鳥ぞ空掩ひ来る

悲みに生ける人どち手をとりに行く島ありやわたつみのはて